第5章　齟齬の世界

「**誰も踏みにじられない世界は可能か？**」

この問いこそが、第１章の冒頭に示した通り、この作品の関心の中心でした。

一方、第２章～第４章の議論より、「**いったいこれは何なのか？**」という万物の真理に対する仮説を得る事ができました。

その真理を元に、冒頭の問いに答えようとした試みこそがこの作品であり、最後の章です。

「誰も踏みにじられない世界」は、果たして可能なのでしょうか？

もう少しだけ、おつきあいいただけたら幸いです。

5.1 ヒュームの法則

さて、第３章の議論より、「**あらゆる＜わたし＞は＜現＞であり得る**」が帰結として導き出されました。

これが仮に事実として正しいとすれば、この世界で行われている搾取、暴力、戦争、あるいは食肉のためのと殺行為等々、他者に対する加害行為はすべて、**自分で自分を痛みつける一種の独り相撲、マッチポンプ、あるいは自傷行為や自殺のようなもの**、ともいえると思います[47]。

では、そこから何か、我々人類がこれから従うべき倫理なり行為指針なりを導き出すことができるでしょうか。

ある人は言うでしょう。

「『あらゆる＜わたし＞が＜現＞でありえる』のだから、誰もが苦しまずに生きられる世界を作らなければ。犠牲を少しでもなくさなければ。なぜなら他者を傷つけると、必ず因果応報の報いを受けることになるのだから。私が豚肉を頬張る時、それは次の＜現＞が苦痛の中でと殺される豚である可能性を同時に意味しているのだ！」

しかし一方で、別のある人は言うでしょう。

「『あらゆる＜わたし＞が＜現＞でありえる』のだから、他者を犠牲にすれば、必ず因果応報の報いを受けることになる。しかし逆に、それによって他者を犠牲にする罪は必ず償われることなのだから、むしろ他者を犠牲にすることは倫理的に赦されることになるだろう。だから私は、迷わず豚肉を食べる。その贖罪の機会は、いずれ＜現＞として必ず訪れるのだから！」

---

47 より正確には＜現＞傷行為・＜現＞殺です。

以上のように、**まったく同じ事実から、１８０度異なった行為指針が導きだされる**ことになります。これはどういうことでしょうか。

このことは**「ヒュームの法則」**[48]として知られていることで、ある事実からなんらかのべき論を導き出そうとするとき、必ずその背景には暗黙裏に別のべき論が必要になります。

すなわち、**事実からべき論を直接導き出すことはできない**のです。

たとえば、「ナイフで人を刺したら相手は死ぬ」という事実から、「ナイフで人を刺すべきではない」は直接導出できません。それを導出するには、その前提として「人を殺してはならない」というべき論が必要とされます。ではなぜ「人を殺してはならない」のか、それは「人を殺すことを自由に認めたら社会が存続できない」から。ではなぜ「社会は存続しなければならない」のか、それは……、といった具合です。

そしてそのようにしてべき論の根拠をひたすらさかのぼっていくと、やはり2.1 節であげた「**ミュンヒハウゼンのトリレンマ**」に突き当たります。

そして究極的には、それは「私は生きるべき」、「我々は存続するべき」、「生物としての本能に従うべき」、等々の、本能的動機などの**無根拠な決めつけ**が前提とされていることが明らかになると思います（試しにやってみてください）。

そして**その決めつけ自体には、客観的な根拠などない**のです。

---

[48] 2.7 節の因果律批判と中の人は同じですが、それとはまた別の概念です。

そしておそらくこのことがこの世界に多種多様な価値観や正義を生んでいるひとつの理由なのですが、また同時に、「客観的な正義」というものの成立を不可能にし、異なった正義や価値観同士での醜い争いを生みだす元凶でもあるのだと考えます。

このような争いの輪廻から脱出する方法は、はたしてあるのでしょうか？

5.2「齟齬の世界」と「釈迦の掌」

さて、一方で、ヒュームの法則とは別の方向からみても、この世界には原理上、争いが避けられない理由があります。

ここで、**他者に対する齟齬、すなわち無理解と共感の欠如がなければ他者を害することができず、他者を害することができなければ多様性は成立しない**、ということがこの作品の一つのテーマでした。

一見無茶な言い分にも聞こえますが、事実として、地球生命はそのようにして進化してきたし、人類文明はそのようにして発展してきたのです。

端的に言えば、**誰かの存在は他の誰かを過小に評価して否定することによってはじめて成立する**、という身も蓋もない仕組みがこの現実世界の本質なのだと思います。「ヒュームの法則」と同様、これも明らかに、争いの原因であると言えそうです。

そのような仕組みをここでは**「齟齬の世界」**と呼ぶことにします。

そして、ここで重要なのは、このことを「何を馬鹿なことを。そんなことはない、なぜなら～」などと否定しようとすれば、その否定自体が「誰かを過小に評価して否定すること」であり、よってこの主張を肯定することになることです。

一見無意味な言葉遊びのようですが、実はそのような**自己言及構造**こそがこの主張の本質だと思っています。なぜならその構造によってこの主張自体をメタ的に俯瞰することができなくなるからです。

私はそのような俯瞰不可能性を**「釈迦の掌」**と呼んでいます。

「釈迦の掌」とは、いわゆる「寛容のパラドックス」にみられるような、その主張自体によってその主張の成立が不可能になるような自己言及的な構造を一般化した概念です[49]。

「悲寛容に対して寛容であることは非寛容と同じ」、「正しさの押しつけを否定すること自体が正しさの押しつけ」、「虚栄を否定すること自体が虚栄」、「何事にも囚われてはならないという囚われ」、「煩悩を捨てたいと願う煩悩」、等々、それらの構造は皆、釈迦の掌です。

そして「釈迦の掌」もまた、あらゆる対立や争い、差別や戦争の根本原因であると私は考えています。

なぜなら自分達に対して攻撃してきたり侵襲してきたり踏みにじってきたりするような非寛容な相手に対して寛容であることが**論理的に**不可能だからこそ争いや対立は起こるからであり[50]、そのような寛容のパラドックスは前述のような自己言及性、すなわち釈迦の掌によって成り立っているからです。

「ヒュームの法則」、**「釈迦の掌」**、そして**「齟齬の世界」**、この三つの克服しようのない絶対的な原理、絶対的な真理、絶対的な牙城によって、この世界は醜い争いで満ちていて、その結果として、皆が苦しみと憎悪に追い込まれ、自殺に追い込まれています。

それらは人類がいまだに現実世界はもちろん、あらゆる創作において乗り越えられずにいる、この現実世界のラスボスのようなテーゼだと思っています。

そしてそれらの原理こそが、自分がこの作品を通して乗り越えようと挑んだ

---

[49] いわゆる「嘘つきのパラドックス」のような構造だと思います。

[50] 今の世界に住んでいる我々は例を挙げるのに困ることなどないでしょう。

テーマの本質、本丸に他なりません。

「誰も踏みにじられない世界」世界を達成するためには、**ヒュームの法則**と**釈迦の掌**、そして**齟齬の世界**を越えていかなければならないのです。

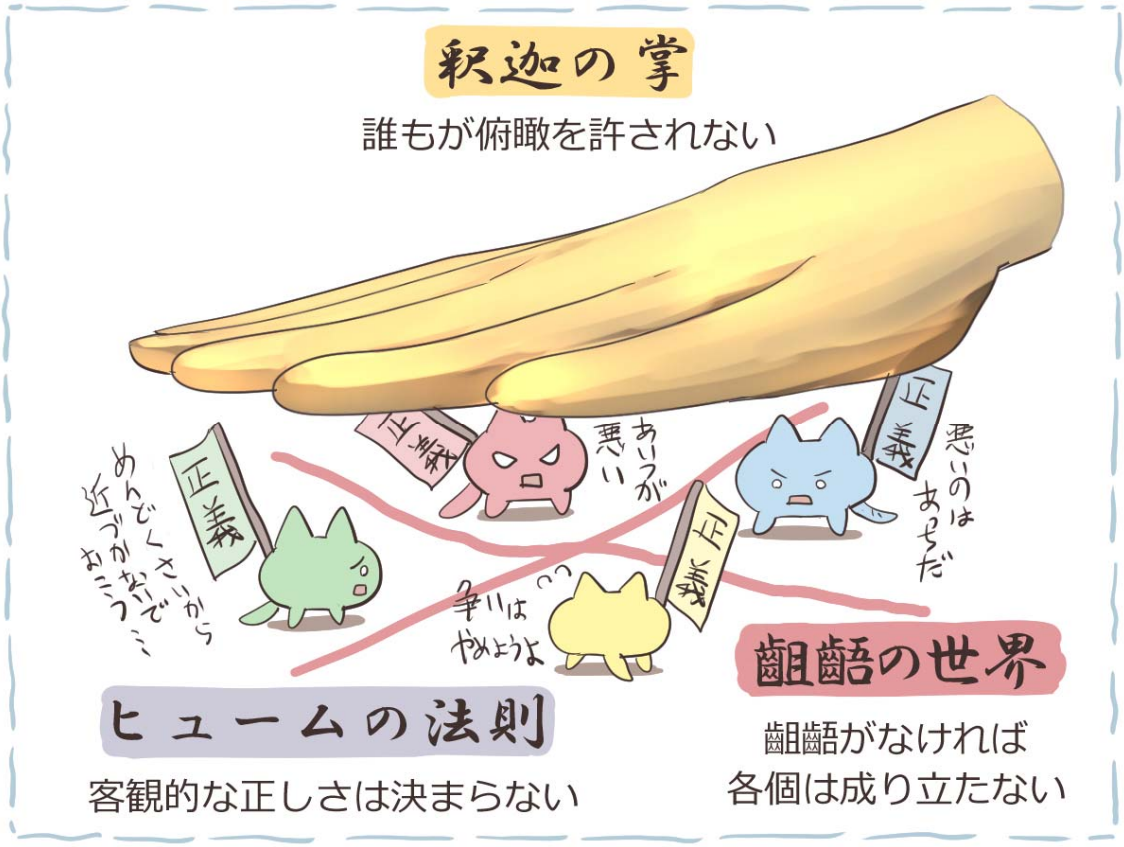

図　「釈迦の掌」「ヒュームの法則」「齟齬の世界」

5.3「生きる」ということ

この世界において生きるということは他者と対立し、競争し、戦い、殺し合う[51]ということです。「**釈迦の掌**」によって誰もがそれを俯瞰することは許されず、皆が地べたに這いつくばってお互いを否定しあう対立構造に荷担するしかありません。

争いを避け、平和を求めたり中立の立場を取ることもまた、なんら物事を俯瞰していることにはならず、それ自体が一つの積極的な態度表明であって、「釈迦の**掌**」の手の内にあります。そして何より重要なのは、そのような態度は体制側や加害側、より非がある側を擁護して被害者側や弱い立場の人たちを抑圧し踏みにじる態度に繋がるということです。

９対１で片方に非がある時に中立の立場をとることは、９：１と５：５の差分だけ、非がある側を擁護する態度です。そしてこの世界に完全に５：５の対立なんてあり得ません。よって、中立や静観は常に、より非がある側を擁護する態度に他なりません。

イジメを観て見ぬ振りをする態度はそれに荷担する事と同じです。

その意味で、**中立は、常に悪**　なのです。

もちろん、戦争で人が死ぬことは悪い事ですし、醜く罵り合う人たちを端から見たら迷惑でしょう。だから当然、戦うことが常に善となることはあり得ません。ギスギスとした争いは誰だって避けたいでしょう。

しかし、それにも関わらず、「戦わない」とか「誰も支持しない」ということは、それ自体がより非がある側を擁護する態度であるため、「常に悪」なのです。

---

[51] 実際に自殺者が大量に出ていることを考えると、恐ろしいことに日本のような平和な社会においてさえ、この表現はまったく過激なものでも過剰なものでもないことになります。紛争地域だとか少数民族を弾圧する独裁国家などにおいてはなおさらです。

「みんな違って、みんないい」はあり得ません。「みんな違って、しかし我々を踏みにじったり害したり傷つけたりするものは悪」であり、それを排除するために戦わなければならないのです。

そしてその前提の上で、それでもなお、「**齟齬の世界**」によって、誰かを否定し、傷つけることなしには個は成立しないのです。

ライオンはシマウマを食い殺さなければ生きていけないし、シマウマは飢えたライオンを見捨てて逃げなければ生きていけません。ボケはボケることで周囲に迷惑をかけなければ成立しないし、ツッコミはツッコむことで誰かを断罪しなければ成立しません。独裁者は民衆を弾圧することで独裁者であれるし、民衆はそれと戦わなければ粛正され、殺されます。やさしく寛容な世界は他者を害する者を排斥することで初めて成立し、他害を害する者はその存在のためにやさしい世界を踏みにじり寛容を破壊しなければなりません。

豚肉のショウガ焼きは豚を殺傷することで初めて成立するのです！！！！！

そしてそもそも「**ヒュームの法則**」によって客観的な正義は存在しないため、「どちらにより非があるか」というジャッジすら、客観的な根拠を持ち得ません。

故に、あらゆる正義はある「我々」の正当化でしかありません。だからこそ誰もが自分や自分達の生命と尊厳を守るために、自分や自分達の帰属の正義を主張して戦わなければなりません。

この論理的に導かれる地獄のような、悪魔のような仕組みが、この世界に争いがなくならない根本的な理由だと思っています。

なんと絶望的なことでしょうか！！！！！
なんと不快なことでしょうか！！！！！！！！！！！！
なんと反吐がでることでしょうか！！！！！！！！！！！！！！

しかし、それを受け入れられない者は踏みにじられ、軽んじられ、殺されるしかないのです（歴史を振り返ってみても、今の世界を眺めてみても、例を挙げるのに困ることはまったくないでしょう）。

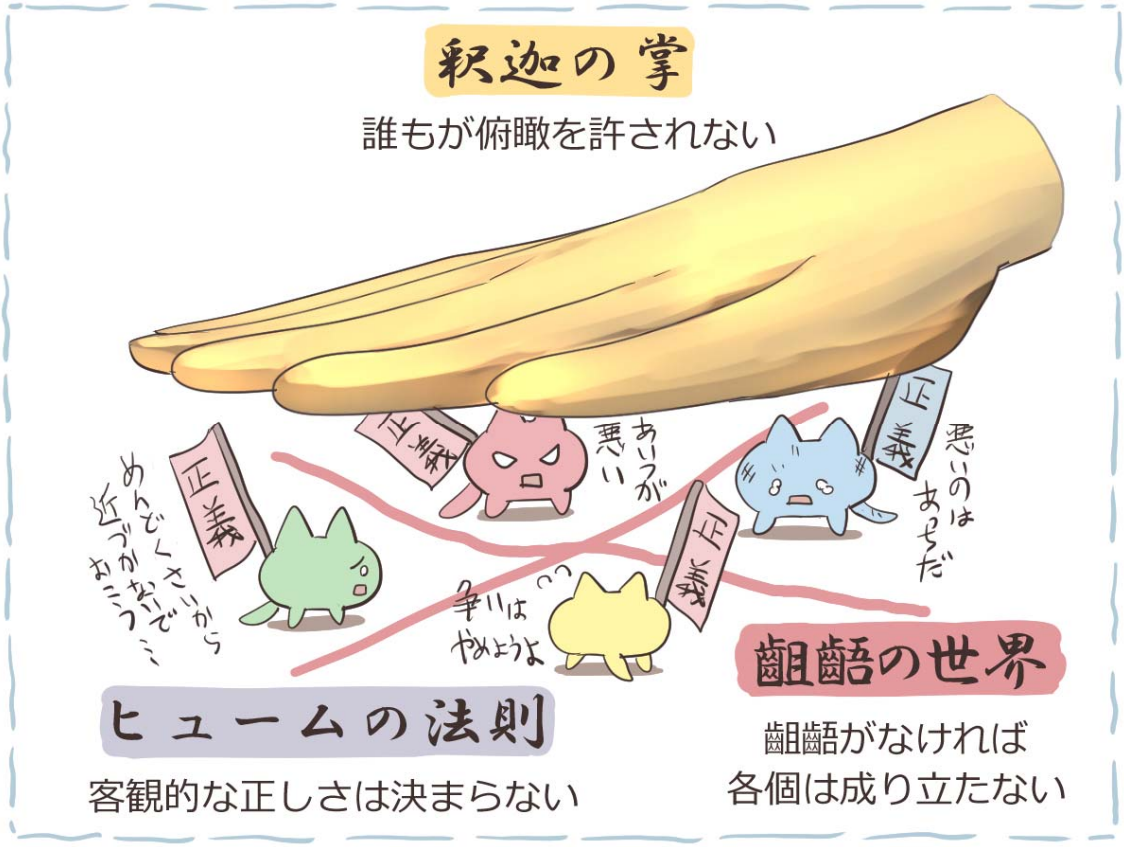

図　「中立」はより非がある側を擁護する

5.4 齟齬のない世界

「誰も踏みにじられない世界はどうすれば可能か？」

この問いこそが、私が＋i 話シリーズのころからずっと考えてきた問いであり、またこの作品を描き始めた最も根源的な動機でした。

しかし、ここまで見てきたように、「誰も踏みにじられない世界」の成立は三重の意味で不可能さを抱えています。

第一に、「誰も踏みにじられない世界」を実現する為には、誰かを踏みにじったり害したりするような者と戦い、排除しなければなりません。すなわち、そのような者の存在を否定し、踏みにじらなければならず、寛容のパラドックスに陥ります。これが、「**釈迦の掌**」です。

第二に、「誰も踏みにじられない世界」においては、適応度競争が不可能になり、淘汰圧がなくなります。よって、「肉食獣」とか「草食獣」などといった、適応上進化させてきた形質は退化していき、多様性が消失してしまうことになり、結果として、それらの多様性を踏みにじってしまうことになります。これが、「**齟齬の世界**」です。

第三に、そもそも「誰も踏みにじられない世界」を作る事の正しさには客観的な根拠がないため、それを他者に押しつけたりすることの正当性も、客観的に存在しないことになります。これが、「**ヒュームの法則**」です。

以上のような不可能さを乗り越えて「誰も踏みにじられない世界」を実現するためには、以下の三つが前提とされなければならないことがわかります。

すなわち、

- ✓ **第一前提：**
  誰かを害したり踏みにじったりする行為を否定し、この世界から排除することを許容すること
- ✓ **第二前提：**
  その結果として多様性が消失することを受け入れること
- ✓ **第三前提：**
  「誰も踏みにじられない世界」の成立を皆が究極目的として受容すること。

この三つです。

この三つの前提を眺めたとき、「なんと素晴らしい！　ただちに受け入れるべきだ！」と、思うでしょうか？　それとも、「こんなの気が狂っている、正気の沙汰ではない」と思うでしょうか？

もちろん、どちらもあり得ると思います。しかし、どちらもあり得る、では困るのです。誰もがもれなくこの三つの前提を受け入れなければ、「誰も踏みにじられない世界」を達成することはできません。

ではそれは一体、どのように達成されるというのでしょうか？

さてここで、十分に技術が発達した未来の世界を想像してみます。

そのような世界では、当然、人間同士の主観的意識を共有するようなことも、可能になっているでしょう。

ここで、主観的意識の共有によるメリットを考えてみます。共有している両

者はそれぞれがもつ知識や技術をお互いに利用できます。すなわち、意識が分断された個人が 2 人いるよりも、意識を共有している 2 人の方が、よりパフォーマンスが上、ということになります。つまり、意識を共有している方が、より競争力が高く、適応的、ということになります。

よって、主観的意識の共有技術が十分に行き渡った世界では、共有している者たちはしていない者たちに比べて競争力に勝り、適応的に有利になるため、共有を拒む個体は**競争上、淘汰されます**。

さらにここで、意識を共有している者どうしではお互いの手の内が分かるため、裏切り戦略が不可能になります。また、相手の主観的感情や痛みも伝わるため、他者を害することができなくなります。

よって、究極的には、「他者を害する」という行動戦略は世界から自動的に排除されることとなります。これにより第一前提が満たされます。

また、その結果として「多様性が消失する」からといって、共有を解除すれば共有した個体群に競争力で劣ってしまい、淘汰されてしまうため、だれも共有を解除することができません。よって、そのような現状を受け入れるしかありません。これにより第二前提が満たされます。

さらに、ヒュームの法則により「生きなければならない」に客観的な根拠はないため、その結果として世界が自死に向かうことの是非を、誰も客観的に判断することはできません。

以上より、十分技術が発達し、主観的意識の共有技術が行き渡った世界では、上で挙げた三つの前提がすべて自動的に満たされることになり、「誰も踏みにじられない世界」が実現することとなります。

それが、この作品世界の住民達が到達した、「齟齬のない」究極の世界です。

5.5 「生きるべき」

「……いやいや、そうはならないだろう。」

そういう声が聞こえてきそうです。特に、皆が自死に繋がる道に同意する、という第三前提の部分は、理解されにくいかもしれません。

しかし逆に、まさにここにこそ、「私たちはなぜ生きるのか」という重大な問いの答えが隠れていると思うのです。

ここで再び、ヒュームの法則について考えてみます。あらゆるべき論は結局のところ「生きるべき」へと還元され、そして「生きるべき」そのものは無根拠なのでした。

それではなぜ、無根拠であるはずの「生きるべき」に従って、我々生命は生きているのでしょうか。

それは、生命が「生きるべき」を「快」そして「不快」という形で生理的に**実装している**からです。そして**実際にべき論として機能しているのは、明らかにこの実装レベル**です。犬や猫は「生きるべき」に従って生きているわけではなく、「快」を求め「不快」を避けているからこそ、その結果として生き続けているわけです。このことは人間の場合においても、多少事情は複雑ではありますが、根本は同じであると考えられます。

だからこそ、不快が極端に強くなれば「生きるべき」という、その実装の本来の目的を乗り越えて、自殺、ということが起こりえます。例えば病苦による自死などはその端的な例でしょう。自殺が禁忌とされるのも、結局はそれによって周囲が不快を感じるからに過ぎないと考えられます。

もっと言えば、「生きるべき」は自殺を止める根拠としてはほとんど機能しな

いでしょう。今ビルの屋上から飛び降りようとしている人に向かって、「死ぬべきではない、生きるべきである。ただし根拠はない」と説教をしたところで、それで思いとどまる人がどれだけいるでしょうか？　人はその無根拠な前提ではなく、その実装としての「快」「不快」にすがることで、初めて生きていくことができるのです。

故に、「生きるべき」の是非を問うことは、実際には無意味なのです。そうではなく、その実装レベルを満たす戦略、すなわちそれぞれの**個としての幸福度を最大化させる戦略**がとられるならば、そちらが優先されるはずです。

我々の現実世界では、それによって「全体の生存」よりも「個々の幸福」が優先されることで、共有地の悲劇が発生し、環境破壊など、さまざまな問題が生じています。この作品の世界で起こっていることは、そのより根本的な、穏やかな、そして破局的なケースだということです。

5.6 愛の道

前節では「生きるべき」そのものは無意味であり、むしろその実装としての「快」と「不快」の方が我々の行動を特徴付けるのだ、ということを考えました。そのことに従うならば、全体の幸福度を最大化させた結果として世界が自死に向かうとしても、それを止める根拠はないことになります。

……いや、確かにそれは虫や獣など生命一般の行動基準としては正しいようにも思えます。しかし、我々人間は理性的な存在者である以上、「生きるべき」というべき論そのものに意義をみいだそうという考えが、まだあるようにも思えます。例えば末期がん患者をひたすら延命し続ける行為であったり、あるいは持続可能な社会を目指そうという取り組みも、そういう理性的な動機から来ている部分があるはずです。

では、そのような理性的な考えが機能することはないのでしょうか？

ここで、「万物の真理」を思い出してみます。

第３章より、「わたし」の主観的な連続性は記憶が担保しているにすぎない以上、生きようが死のうが、いずれにせよ＜わたし＞＝＜世界＞は命を終える毎に消滅し、新たな＜わたし＞＝＜世界＞が生成すると考えられます。であれば、結局のところいつどのタイミングで死のうが、新たな生がまた生じるのであるから、**「生きるべき」は理性的に考えても、無意味となります**。すなわち、主観の共有によってこのような**＜現＞の本来の姿**がみえるようになった時、＜わたし＞を保持するためのあらゆる正しさは無意味となるのです。人生はもはや一度きりではなく、命はかけがえの**ある**ものなのですから。

よって、「万物の真理」に到達した後では、「生きるべき」というべき論は機

能しなくなり、世界が持続可能であることは、もはや優先されなくなります。

そして何が優先されるかというと、それはこれまで述べたように、ただただ自らの、すなわち皆の主観的な幸福度を最大化させることです。

ここに、「～べき」から「～したい」への、すなわち「正しさ」から「好き」への転換をみます。それはまさに自死の道を選びながらも、それでもなおこの世界が即座に自死を決行しなかった理由でもあります。

そのような世界を「好き」と言えたからこそ、この世界は自死の道を選びながらも、なお余生を生き続ける、という選択ができたのです。

それこそが「齟齬のない」この作品の世界。この作品世界の住民達が目指した、最早誰も踏みにじられることのない、愛の道なのです。

5.7 生きる道

私は「**誰も踏みにじられない世界は可能か？**」という問いをずっと考えてきました。それは別の言葉で言えば、「この世界ではとても生きていけないほど弱い人間は、どのようにして救われたらよいのか？」　という問いでもあります。

「弱さ」というものが競争関係の中で定義される概念であることを考えると、そして「生きる」という行為が本質的に競争関係の中で成立するものであることを考えると、結局、「弱い人間、競争力のない人間は踏みにじられても仕方が無い」が必然的に導かれてしまいます。

わたしはこれを手放しに許すことが、どうしてもできませんでした。

「競争」は、この世界の豊かさの源泉です。それは明らかな事実ですが、また同時に人を自殺に追い込む諸悪の根源でもあるのだと思います。

ここで、この作品の冒頭に挙げたひとつの問題について考えます。それは私が「ライオンとシマウマ問題」と呼んでいる思考実験です。

ライオンとシマウマが対峙しています。

ライオンは空腹で倒れる寸前であり、シマウマを食べなければ生きていけません。

一方シマウマは、当然ライオンに食べられると死んでしまいます。

そこに聖者が通りかかりました。

襲われているシマウマを助ければライオンは飢え死にし、ライオンを助ければシマウマは食い殺されます。では、見て見ぬ振りをすることが正しいのでしょうか？

聖者はどのように行動することが、最も倫理的なのでしょうか？

もちろん、これは寓話であり、ライオンとシマウマという変項には個人や組織、民族、国家、思想、価値観、生物種、経済的関係、生態系や人類活動など、あらゆるものが当てはまります。

そしてこの寓話の中にはこの章の最初にあげた、「ヒュームの法則」「釈迦の掌」そして「祖語の世界」、すべてが含まれていることがわかると思います。

だからこそ私はこの寓話をこの作品の冒頭に挙げました。

この寓話をいかにして乗り越えるかということが、私がこの作品において乗り越えようとしたテーゼに他なりません。

この世界に客観的な正義などありません。

だからこそ、「自分は絶対に正しい」などと考える事は傲慢でしかありません。

しかし、だからこそ、「中立」も「静観」も「平和主義」も「社会的常識」も「法律」も、それ自体が常に正しいことにはならず、だからこそ、誰もが自分の信じる正しさに従って自らが定める「悪」と対立し、競争し、戦うことを強いられます。北朝鮮でも、ウイグル自治区でも、香港でも、アメリカでも、ミャンマーでも、ウクライナでも、歴史を振り返ってみても、どんなに大きな組織でも、どんなに小さな組織でも、どこでも同じです。

それができない者は、悲しいことですが、この世界では生きていくことはできないのです。

私たちに齟齬があり、お互いの気持ちが分かり合えない以上、「対立や競争の

ない世界」が意味するのは、ある者の平穏を守るために別のある者を抑圧し、押さえつけ、虐げる世界でしかありません。そのような構図は何処まで行っても「争い」や「対立」や「競争」の内側にあります。まさに「釈迦の掌」です。

だから、この世界で私たちがお互いに対立し、競争しあうことは、悲しいことですが、仕方のないことなのだと思いますし、むしろ健全な、真っ当な、普通なことなのだと思います。

私たちは、お互いがギスギスと罵りあい対立しあうこの世界の居心地の悪さを、生きていく以上は、普通の、当たり前のこととして、それどころか、健全な、望ましいものとして、肯定的に受け入れざるを得ないのだと思います。

開き直って万人の万人に対する利己的な闘争世界を受け入れるのではなく、逆に開き直って抑圧された全体主義的な平和を受け入れるのでもなく、お互いが適度に分断され、適度にギスギスと殴り合っているような、それでいて同時に皆が内心では平和を望んでいるような、ダブルスタンダードな、中途半端な、気持ちの悪い、醜悪な、見苦しい状態を、むしろ健全な、望ましいものとして、肯定的に受け入れるしかないのだと思います。

そしてそれによって初めて、この世界には豊かな多様性が成立するのです。

このようなこの世界のあり方を考えたとき、私はそのあまりの醜悪さに吐き気を催し、何度も何度も自殺を考えました。こんな世界でこれ以上生きていたくない、こんな世界には荷担したくない、こんなあり方はもう終わりにしたい。はやく、＜すべて＞の大海へとこの＜わたし＞もろともこの＜世界＞を沈め、完全に消滅させたい。適応度競争のない、新たな「あり方」へと、新たな存在形式へと、ポジティブな気持ちで、前向きな気持ちで、旅立ちたい。

そう、強く、強く、思い続けてきました。

それでもなお、自分がかろうじて自殺をしないでいたのは、この世界には少しだけ救いがあったからです。
それは創作世界という救いです。

この世界のあり方はあまりにも醜く、今すぐにでも自殺をしてしまいたくなるくらいに酷いものですが、それでもなお、そこから生みだされた様々な創作物は、私にギリギリのところで救いをあたえ、自殺をギリギリのところで踏みとどまらせてくれました。

だから逆に、そのようなものこそが、この現実世界が存在する意味であり、目的なのだと、私は考えようとしました。
我々はなぜか創作世界を現実世界の下に置こうとしがちですが、そうではなく、むしろ現実世界のほうが、創作世界を生みだすため「だけ」にあるのだと思ったのです。

よく、異世界に迷い込んだ主人公がその世界の中で自らの問題に向き合い、成長し、問題を解決し、そして最終的に現実世界に戻っていく、というシナリオがあると思います。
このとき、異世界に迷い込んだ主人公が最終的に現実世界を捨てて、異世界に永住することを望むような終わり方をしたとき、我々の側からしたら何か見捨てられたような、裏切られたような、居心地の悪さを感じることでしょう。
この原因は当然、我々がこの「現実」世界の側にいるからに他なりません。
しかし、＜すべて＞の内部にはあらゆる可能な＜世界＞が可能であるように、この「現実」は唯一のあり方ではないし、その正当性などというものはやはり客観的には存在しないのです。それが「**ヒュームの法則**」なのでした。
劇場版シン・エヴァンゲリヲンにて、碇シンジ君は最終的にこの現実世界（に

似たような）世界を選択しました。

しかし、それがあたかも健全で正統なことであるかのように感じられるのは、単に我々がその現実世界（と似たような）世界に所属しているからに他なりません。

それが唯一の正しいあり方だなどという保証は、誰にも与えられないのです。

しかし、だからといって、何も選択しないことは不可能です。

我々はなんらかの「あり方」をとりあえず肯定し、選択しなければなりません。＜すべて＞の立場からあらゆる＜世界＞を俯瞰することなど、誰にもできません。それが「**釈迦の掌**」なのでした。

＜すべて＞とは、要するに「何も言っていない」と同じなのです。

だから、（原理主義的な意味での）相対主義は不可能であり、（原理主義的な意味での）「みんな違って、みんないい」は不可能です。だからこそ、我々は何らかのあり方を、それが無根拠であると分かっていながらも、それでもやはり積極的に「選択」し、その結果として、それを守るために、それを否定するものと戦う事を受け入れなければなりません。

仮にそれが同じ＜現＞同士による独り相撲であり、自傷行為であり、自殺行為であり、茶番に過ぎないと分かっていても、です。

そして、その結果として初めて、我々は「何ものか」であることができるのです。これが、「**齟齬の世界**」なのでした。

そして、その「何か」を選択する動機、それこそが、「好き」に他ならないと思います。

「好き」は、私が私であるための、一つの存在であるための、力なのです。

自殺を考えてみて思うのは、現実世界と同じように、創作世界もまた、「私」の死によって永遠に失われる、ということです。実際、第四部までにみてきたように、この＜世界＞とは＜わたし＞による見せかけの存在に過ぎず、いってみればフィクションに過ぎません。だから、存在論的な価値として、現実世界と創作世界は等価であるとも言えます。どちらも共に、「粗視化の入れ子の組み合わせ」という同じメカニズムによって生みだされた創発現象に他なりません。そのどちらを優遇するかということは、結局の所、恣意的な問題に過ぎないのです。そしてもちろん、そのような恣意性に客観的根拠はありません。

だからこそ、わたしは創作世界を現実世界以上に、大切に思おうとしたのです。

それがこの作品の主人公が出した答えです。

5.8 最後に

最後までおつきあいいただきありがとうございました。

「誰も踏みにじられない世界を考え、それを作品という形に昇華して表現すること」、そして「『**これ**はいったい何なのか』を説明する真理を発見し、それを作品という形に昇華して表現する事」。これは自分の人生における夢でした。

もちろん、ここで示したもろもろの考えがはたしてあっているのかどうかは不明ですが、少なくとも自分の中では、これ以上納得のいく考えがあるとは思えないので、とりあえず、その夢は（暫定的に）果たせたのだと考えています。

第 5 話で語られた内容は、あくまで本作品の設定です。

しかし、138 億年続いてきたこの現実世界という＜世界＞こそが、この＜わたし＞という主観が作り上げてきた、「そごのせかい」というひとつの作品に他ならないのだとも考えられます。

だからその意味で、この作品世界の設定は、そのままイコールとして、この現実世界の真理と重なることになります。

このような仕方で第四の壁を越えた作品を生みだす事、それこそが、この＜世界＞が 138 億年前に誕生し、そして今日まで存在してきたことの意味だったのではないかと思っています。

この作品を描き終えたら自殺するつもりでいました。

というより、自殺限界まで追い込まれた自分をギリギリの精神状態でどうやって自助し救うかということを考えた結果が、これまで描いてきた作品でした。

しかしそこから明らかになったのは、そのような世界は残念ながら救いにはなり得ない、ということです。

それどころかむしろ、そのような作品は自分をひたすらに苦しめ、結局、精神的に追い込む結果となりました。そのような世界は自分の命をギリギリのところで救ってくれる命綱になりまし、作品を描いていたお陰で私はかろうじて救われ、生き続けることができたのですが、だからこそ、同時にそれは自分にとって大きな執着となり、致命的な急所にもなったのです。仏教が言うように、あらゆる執着は必ず苦しみを生むのだと思います。何かに救いを求めるならば、その救いが強ければ強いほど、同時にそれによって精神的に追い込まれる。その意味で、本当はこの世界に救いなど一切存在しないのだと思います。

だから私は精神が崩壊し、自殺を決行する寸前まで追い込まれました。あの時助けてもらえなかったら、本当に危なかったと思います。

この世界は醜い争いや競争で満ちていて、そういうものの中で純粋な「好き」という想いは汚され歪んでしまいがちです。そしてそういうものに流されれば流されるほど、生きることはひたすら苦しいものになってしまいます。だから私はそういうものを取り払った、純粋な「好き」を追い求めようとしました。

しかしそれでもなお、そのような「好き」という感情は、元を正せば生存競争から生まれてきたものなのです。汚れのない、純粋なそれを追い求めた先にあるのは、この作品で示したように、ただ死だけです。

だから、生きる事を選択した私にとって、最終的に着地した所は、とても有耶無耶ですっきりしない、歯切れの悪い、醜悪な、気持ちの悪い所です。しかし、それは最初から分かっていたことです。

そのような気持ち悪さ、居心地の悪さを受け入れる事が、結局、この「そごのせかい」の中で生きるということなのだと思います。

みなさんの支えと、そして irodori の新作がある以上は、そして何より、創作という生きる支えがある以上は、これから先も生きていくことになるのだと思います。

しかしこの世界の構造上、そのような生きる支えもまた、何らかの仕方で誰かに踏みにじられていくことになるでしょう。そのような苦痛に耐え、戦っていられる限りは生きる事ができるのだし、それができなくなったら、もう生きていけない。そのような殺し合いこそが、生命が４０億年続けきた「生きる」という行為の本質であり、ただそれだけのことなのだと思います。

結局、あらゆる「私」が＜現＞であり得るにもかかわらず、その中の限りなく微小な一断片でしかないこの「私」の生命に執着すること、それが「生きる」ということなのであり、同時にそれこそがあらゆる苦しみの原因なのです。

しかし、忘れてはいけません。「万物の真理」を知ってしまった私たちにとって、命は最早かけがえのないものではないのです。そうではなく、一つの命に固執することなく、それぞれの主観的意識たる諸＜わたし＞の幸福と尊厳を守る事、それこそが大切なのだと思います。

次の作品で、またお会いできれば。

すべての＜現＞たる「私」たちへ、祈りを込めて。